

体の動きを補助するロボットスーツ「HAL」を活用した運動機能回復を手掛ける企業・岡山ロボケアセンター（倉敷市幸町）は、障害者アーチェリーで東京パラリンピック代表内定の岡崎愛子さん（34）＝東京都在住、ベリサーブ＝を支援している。四肢にまひがある岡崎さんにHALを無償貸与し、トレーニングに役立ててもらっている。（伊東圭一）

東京パラへ 選手支える ロボスーツ

倉敷企業が無償貸与

岡崎さんは大阪府出身。2005年の尼崎JR脱線事故で頸髄を損傷し、車いす生活となった。アーチェリーと出会ったのは13年。両手の握力はないが、弓をベルトで右手に固定し、左手に弦を保持する器具を装着して射る。昨年6月の世界選手権で3位となり、東京パラ五輪代表に内定した。

同センターは、出資する自動車部品メーカー井原精機（井原市上出部町）の役員が岡崎さんと同じ同志社大出身だった縁で活躍を知り、支援を申し出た。

アーチェリー代表岡崎さん 体幹強化に活用

3月下旬にスタッフが上京し、腹筋や背筋がほとんど使えない岡崎さんのために、腰を支えて転倒を防ぐタイプのHALを手渡した。スーツの機能を生かして体を前後に傾け、骨盤を動かす体操なども指導。競技中に姿勢を安定させ、弓をしっかり構え続けるために必要な体幹の強化が図れるという。



東京パラ五輪に向け練習に打ち込む岡崎さん（本人提供）

岡崎さんに貸与しているのと同じタイプのHAL。腰を支えて転倒を防ぐ

ズーム HAL 筑波大の山海嘉之教授＝岡山市出身＝が開発。体を動かそうとする際、脳から筋肉に流れる電気信号を感知して動作を補助し、機能回復を促すという。医療分野をはじめ、肉体労働の作業負担軽減などに活用されている。岡山ロボケアセンターには井原精機のほか、山海教授が社長を務めるサイバーダイナ（茨城県）などが出資している。

以前はジムで介助を受けて行っていた体幹トレーニングが、自宅に1人で行える時にも可能になり、岡崎さんは「新型コロナウイルス感染症で外出しにくい中、充実した自主トレができるので本当にありがたい」と喜ぶ。

開催延期となった東京パラ五輪に向け、「支援を励みに、レベルを高めて臨みたい」と意気込む岡崎さん。高齢者や障害者の運動機能回復が主力の同センターにとってもアスリートのサポートは初の挑戦となる。

向谷隆社長は「データを蓄積し、機能回復メニューを高度化させていく。岡崎さんの競技力アップだけでなく、生活の質向上にも貢献できれば」と話している。